

平成7年度川崎市測線交点

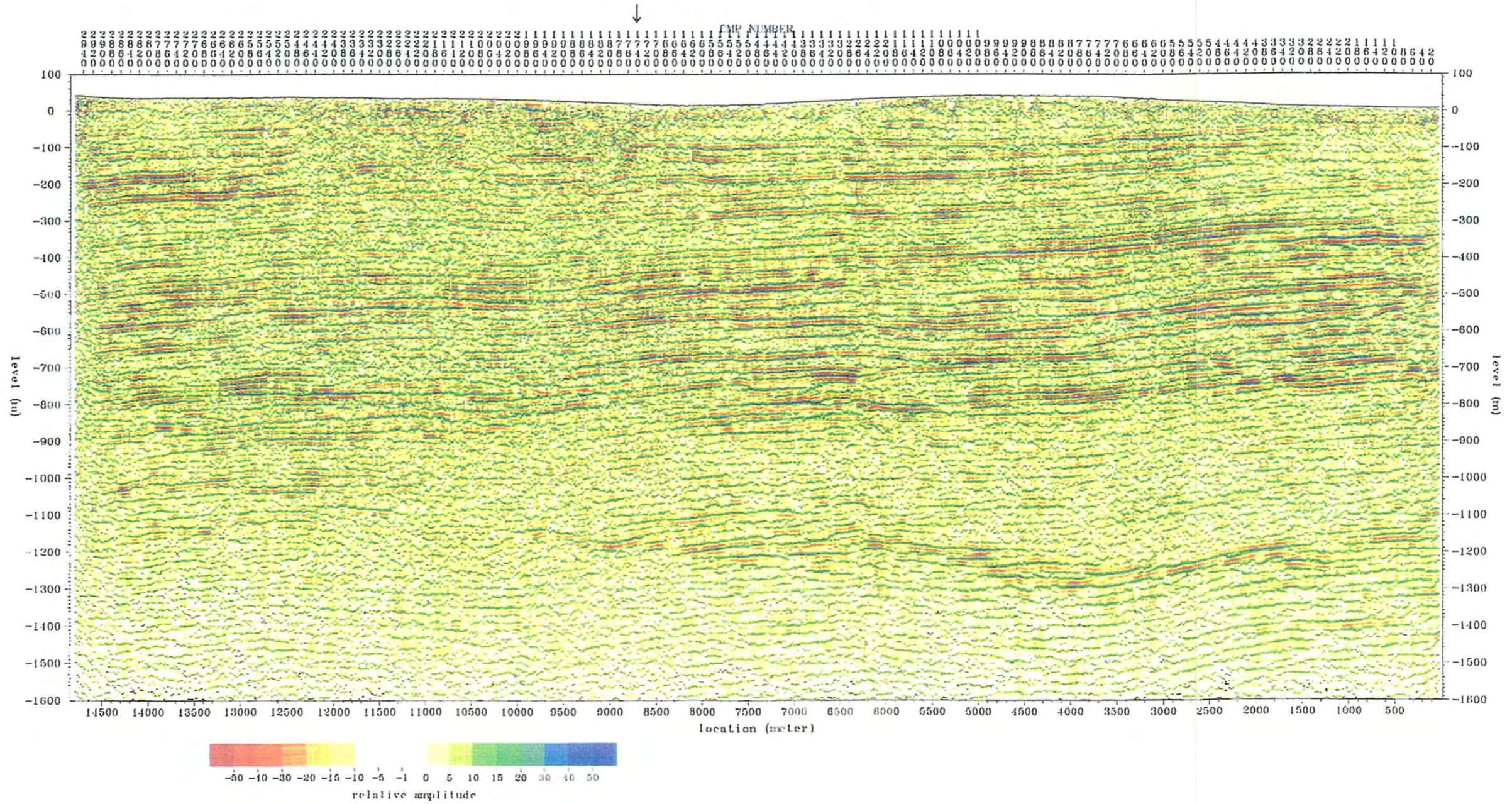


図-6 Line2 深度断面 (縦横比=2:1)





- 平成13年度計画反射測線
- 既存反射測線
- 既存深層「リング」調査位置
- 2000 三浦層群上面深度
- 1500 層岩深度
- 反射法探査により
- 地層に撓みが見られた部分
- 基盤岩に断層が見られた部分

図-8 全体測線位置



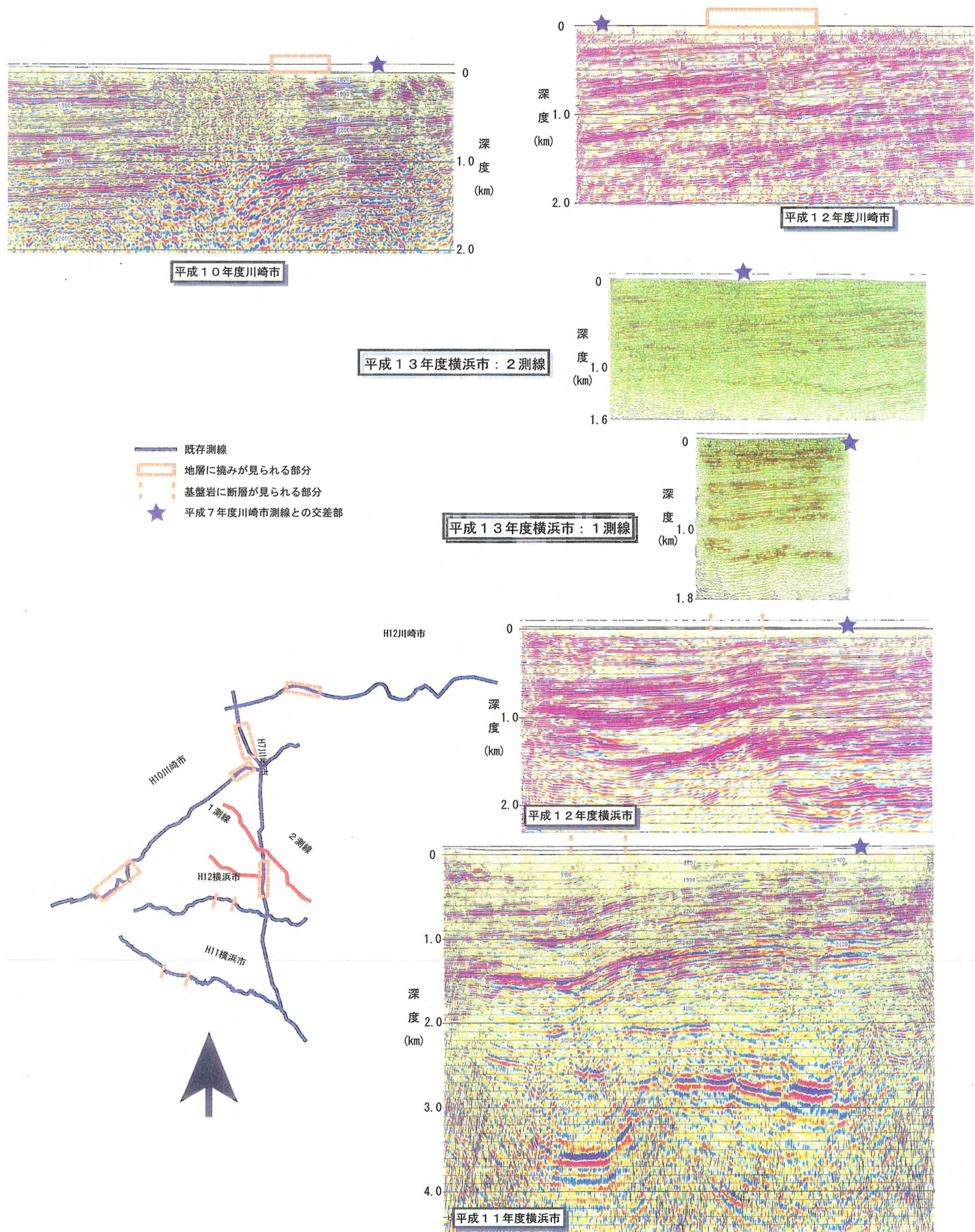
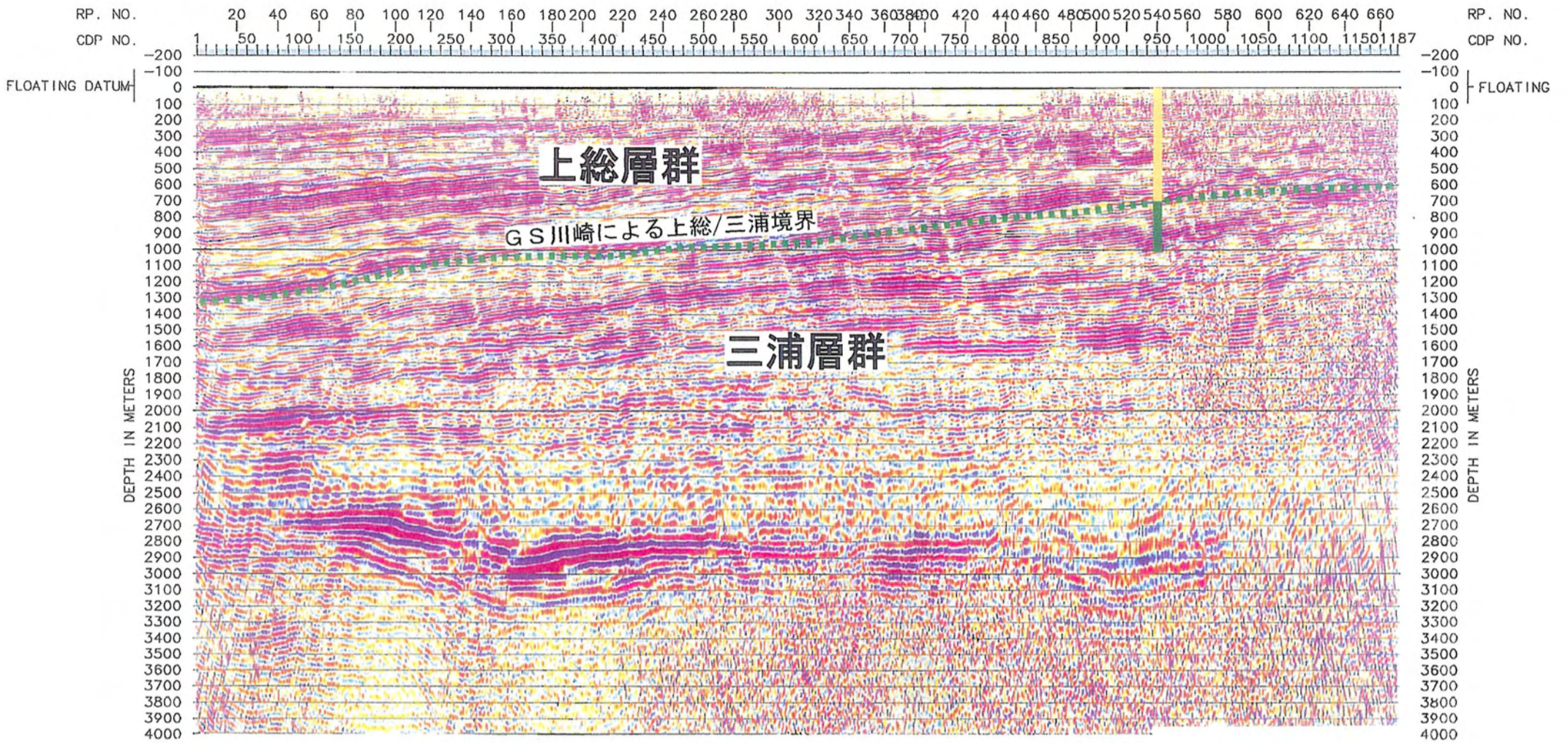


図-9 各測線深度の地層構成対比

平成7年川崎

GS川崎



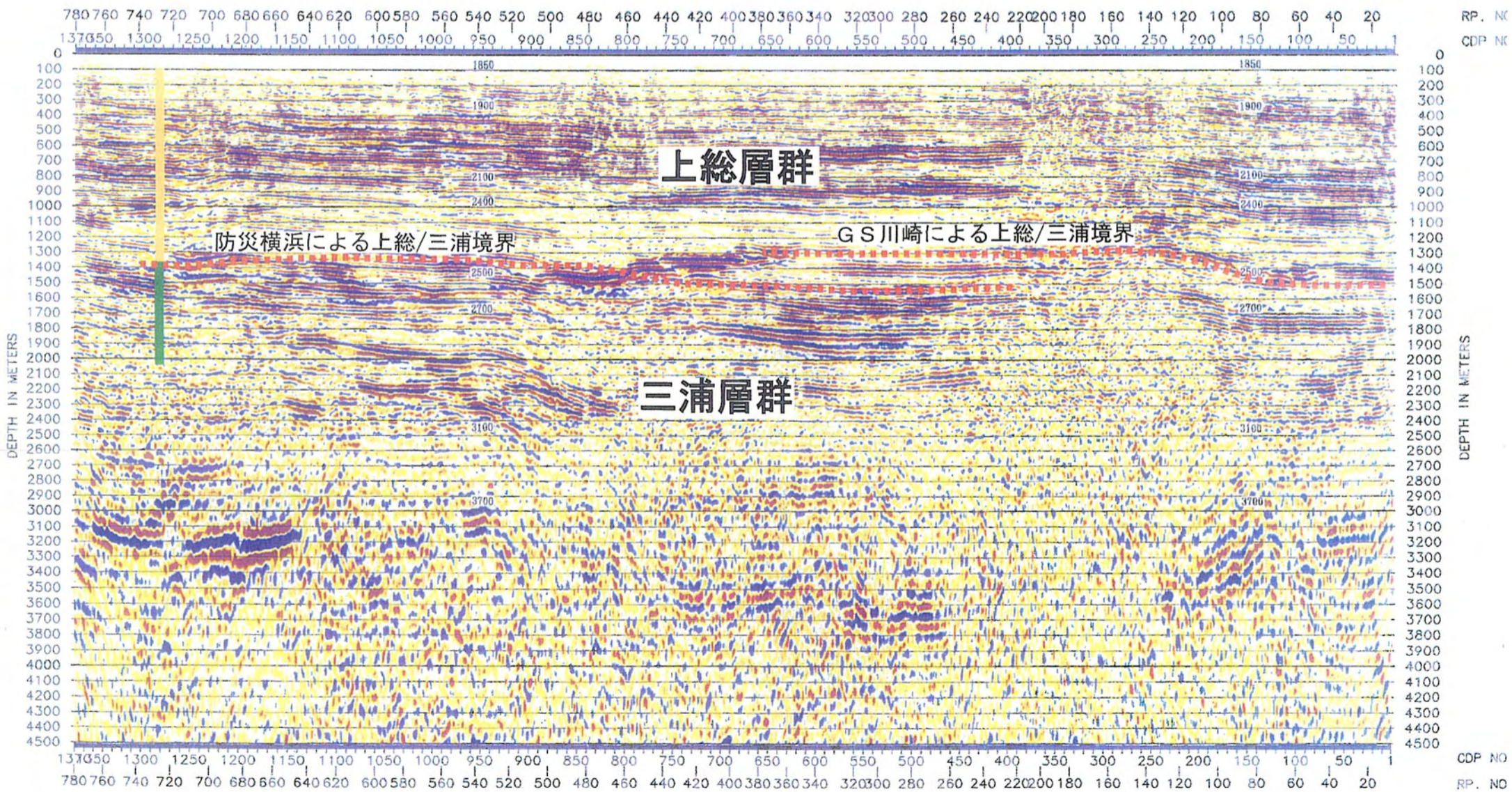
平成12年度 川崎

防災横浜

No. 1

No. 2

平成12年川崎



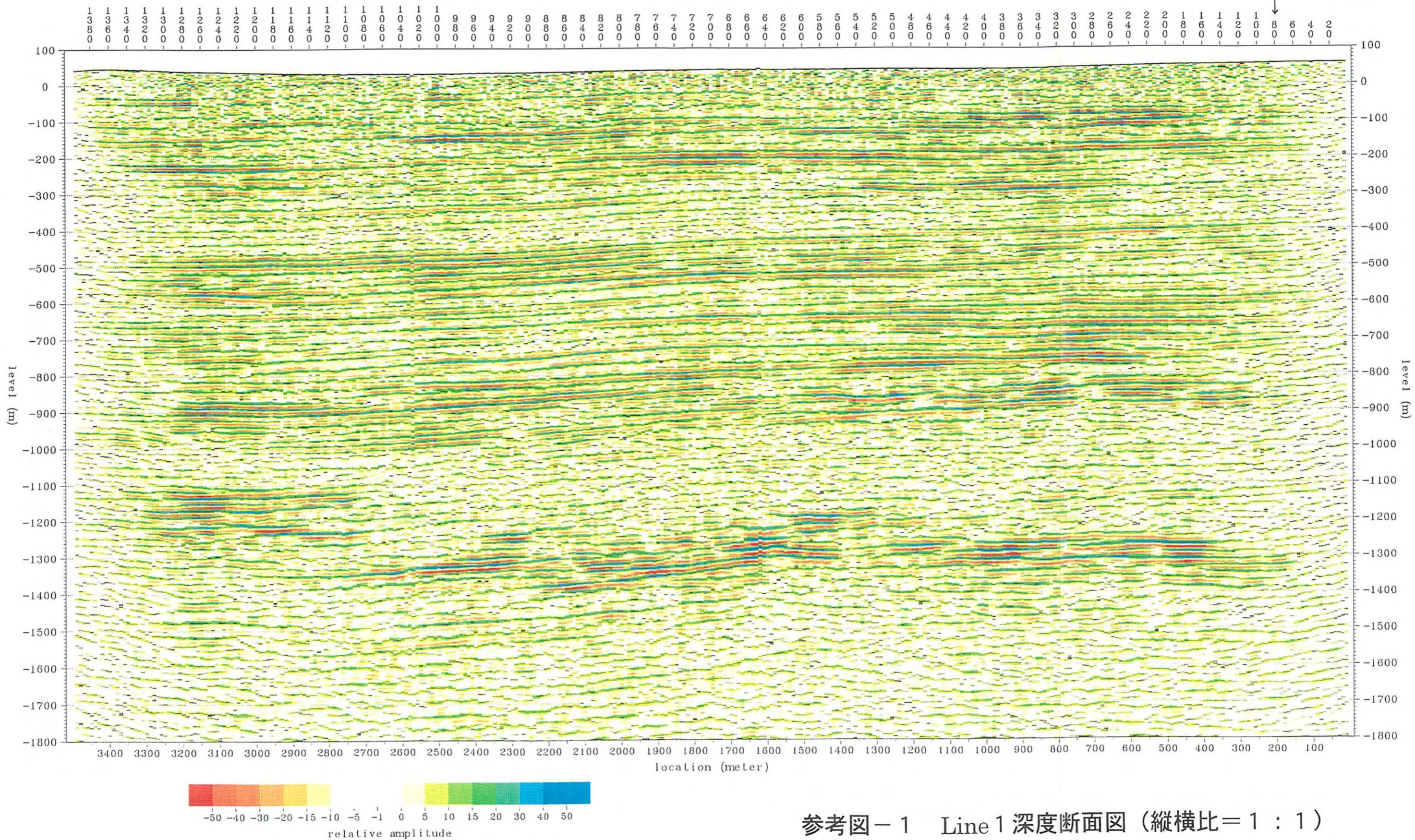
平成7年度 川崎

図-10 深層ボーリングによる地層対比



CMP NUMBER

平成7年度川崎市測線交点



参考図-1 Line 1 深度断面図 (縦横比=1:1)

2002BB03BB28BB 11F043BB09BB

11-plot



平成 13 年度  
第 4 回 横浜市地下段差構造委員会資料  
(総合解析結果報告)

平成 14 年 3 月 28 日

横浜市総務部災害対策室



## 1. 総合解析業務の第4回委員会報告内容

- ①既存ボーリングデータによる海成段丘堆積物調査結果報告
- ②地形図・空中写真による地形面判読結果報告
- ③資料調査のまとめ
- ④今後の調査計画について

## 2. 既存ボーリングデータによる海成段丘堆積物調査

### 2.1 海成段丘堆積物

調査地域周辺の多摩丘陵や下末吉台地には上総層群を削り込んで堆積した海成段丘堆積物が分布している。

多摩丘陵に分布している海成段丘堆積物はおし沼砂礫層、下末吉台地に分布している堆積物は下末吉層と呼ばれ、それぞれをローム層が覆っている。

海成段丘堆積物の上面（離水面）および下面（波食台）は図 1.1 に示すように汀線付近で水平に近い平坦面が形成される。

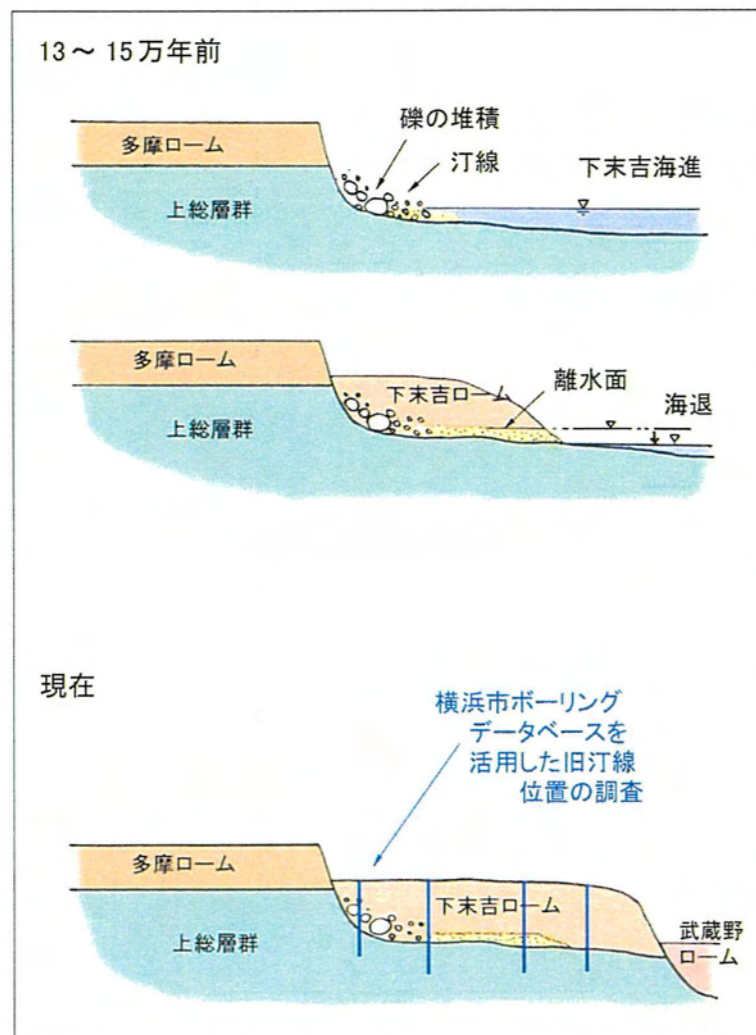


図 1.1 海成段丘の形成と離水面、波食台の調査方法

従って、平坦に形成された面の起伏状況を調べれば、平坦面の形成後に断層が活動しているか否かを確認することができる。

横浜市内の多摩丘陵および下末吉台地における離水面はそれぞれおし沼砂礫層および下末吉層の上面にあたる。また、同地域の旧波食台はそれぞれの地層の基底面にあたる。

既存ボーリングデータ調査では調査地域内にみられる旧汀線付近のおし沼砂礫層と下末吉層の上面とそれぞれの地層の基底面深度についてとりまとめた。

### 2.2 調査結果

平面図にボーリングの位置とおし沼砂礫層および下末吉層の上面と基底面の出現標高を示した。また、これに基づいておし沼砂礫層および下末吉層の上面と基底面標高のコンターマップを作成した。

おし沼砂礫層および下末吉層上面（離水面）のコンターマップを図 2.1 に、それぞれの地層の基底面（波食台）のコンターマップを図 2.2 に示す。コンターマップには平成 11 年度、平成 12 年度に実施した反射法探査結果から予想される撓曲帯の位置を示している。また、コンターは図中の凡例に示しているように標高値ごとに色分けしている。

コンターマップに現れている特徴は以下のとおりである。

#### a) 離水面

- ・ 離水面は比高差 2~6m の尾根と谷からなる形状を呈している。
- ・ 撓曲帯の延長が想定されている地域では、離水面はいずれも幅 3km 程度、比高差 2~6m 程度の谷様となっている。
- ・ 多摩丘陵および下末吉層ともに旧汀線近くではコンターが密になっており、南西方向に遠ざかるにつれてコンターの間隔が広がっている。

#### b) 波食台

- ・ 波食台の面は離水面と同様に比高差 2~8m の北西—南東方向の尾根と谷からなる形状を呈している。
- ・ 撓曲帯の延長が想定されている多摩丘陵地域では、幅 2km 程度、比高差 10m 程度の緩い V 字谷様となっている。下末吉台地域では幅 3.5km 程度、比高差 8m 程度の谷様となっている。
- ・ 多摩丘陵および下末吉層ともに一部では旧汀線近くでコンターが密になっており、南西方向に遠ざかるにつれてコンターの間隔が広がっている。